

全国学力・学習状況調査結果のお知らせ

平成20年4月に行われた全国学力・学習状況調査の調査結果がまとめ、国・県・市などの様子が報じられています。今回の調査で測定できるのは学力の特定の部分となりますが、学校における教育活動の一側面を示しているともいえます。

本校としては今回の結果を受け止め、「生徒一人ひとりに力をつける」ことを、引き続き取り組んでいきます。地域・保護者の皆様には、本調査の趣旨を理解し、受け止めていただきたいと、思います。調査の概要は次の通りです。

1. 調査の目的

全国的な義務教育の機会均等と水準向上のため、児童生徒の学力・学習状況を把握・分析することにより、教育の結果を検証し、改善を図る。

各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において、自らの教育の結果を把握し、改善を図る。

2. 調査日時平成20年4月22日(火)

3. 調査対象中学校3年生生徒(小学校は第6学年児童)

4. 調査内容

教科に関する調査国語、数学の2教科における「知識」と「活用」に関する問題
生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5. 調査結果の概要

(1)教科問題の特性調査 A は、比較的従来の総合的なテストと類似していますが、主として知識に関する問題であり、主に次の内容の調査でした。

身に付けておかなければ、後の学年の学習内容に影響を及ぼす内容。

実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能の内容。調査 B は主として活用という視点からの問題で、実生活に活かすという、生徒にとってあまり経験のなかった設問であり、主に次の内容の調査でした。

知識・技能を実生活の様々な場面に活用する学力。

様々な課題解決のための構想を立て、実践し、評価・改善する学力

(2)教科別の傾向(良い状況と考えられる内容、指導・改善が必要と考えられる内容)

国語

話すこと・聞くこと

話し合いの方向をとらえて適切な発言をする。
話の構成に注意しながら的確に聞き取る。

書くこと

論理の展開に着目し評価批評する。
適切な段落を設けて論理的な文章にする。

読むこと

文章の展開をおさえながら中心的な内容を考える。
文章の展開に即して内容を読みとる。
論理の展開に即して内容を読みとる。

言語事項

漢字の楷書と行書の違いを理解している。
文脈に即して漢字を正しく書く。

数学

数と式

分数の減法の計算をすることができる。
事象を式に表すことができる。
文字式の意味を具体的な事象と関連付けてよみとることができる。

図形

証明で用いられている平行線の性質を理解している。
円周角の性質を理解している。
方針にもとづいて証明することができる。

数量関係

樹形図の意味やその使い方を理解している。
事象における数量の関係を見だし何と何の関係が利用されているかを明らかにできる。
与えられた情報を分類整理することができる。
事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に証明することができる。

(3)生活習慣や学習環境に関する質問紙調査について

朝食を毎日食べている生徒が多い。

部活動に参加している生徒が多い。

学校で友達に会うのが楽しいと思っている生徒が多い。

スポーツを自分は得意ではないと思っているが、スポーツを好きな生徒が多い。

国語や数学が、将来、役に立つと思っている生徒が多い。

11時以降に寝ている生徒が相当数いる。

7時以降に起きている生徒が相当数いる。

6. 今後の取り組みについて

国語では、文章内容の読み取りや、話の内容の聞き取りの力は身につけている。これは「朝読書」の時間の毎日の取り組みが、効果を上げていると考えられるので、今後も継続した取り組みを続けたい。日々の積み重ね、継続的な学習が必要な漢字や知識の部分が充分とは言えないので、授業場面でも繰り返し学習することが大切であるので取り組んでいきたい。

数学では、正の数・負の数の四則計算や式の基本計算は概ね良く理解されている。1年時の少人数学習や基礎学力の定着への取り組みが一定の成果をあげている。一方、筋道を立てて問題を考察し、これを説明する力が充分ではない。日々の授業の中で計算力の向上だけでなく、考えさせる問題を作問し、考えさせ、論理的に思考する力を伸ばすように努めたい。

生活習慣や学習環境に関する調査では、多くの生徒が、学校での友人との生活を楽しくし、部活動に参加し、決まりを守り、学習の必要性を理解している。しかし、就眠時間が11時以降になる生徒が半数を超えている。また、朝食を抜く生徒が2割強いる。心身共に健康な生活を送るためにも「早寝・早起き」の習慣をつけ、食生活の重要性も指導しつつ、家庭へのPRを図りたい。これらは小学校時代からの習慣が大切と思われる。

この問題には本中学校区で取り組んでいる「生徒・児童観」の共有を目指した教育実践の面からも多方面と連携して取り組みたい。